

短 報

チーム基盤型学習 (Team-Based Learning) と実習との つながり：周産期看護学実習後の学生の語りより

飯田真理子¹⁾ 五十嵐ゆかり¹⁾ 新福 洋子¹⁾

Connecting Classroom Lecture and Practicum by Using the Team-Based Learning Method

Mariko IIDA, PhD, CNM, PHN, RN¹⁾ Yukari IGARASHI, PhD, CNM, RN¹⁾
Yoko SHIMPUKU, PhD, CNM, PHN, RN¹⁾

[Abstract]

PURPOSE : To describe and assess the effect of Team-Based Learning (TBL) from student's perception who finished their maternal-newborn nursing practicum.

METHODS : Focus-group interviews to undergraduate students were conducted. The Research Ethics Committee at St. Luke's International University (no. 13-037) approved this study.

RESULTS : From voices of 88 students who participated, two categories were extracted : "connection between classroom lecture and practicum" and "meanings of working as a team". The following six sub-categories were extracted from "connection between classroom lecture and practicum" ; being able to apply knowledge, mastering how to learn, implementing skills at practicum, feelings of insufficiency, etc. The following five sub-categories were extracted from "meanings of working as a team" ; cooperating in the team, exchanging effective opinions among the teams, building up a sense of fellowship, unpleasant feelings to some team members, etc.

CONCLUSIONS : By using the TBL method, students were able to connect their knowledge they learned at classroom to the actual situation during their practicum. However, some felt that their knowledge was not enough and said they wanted more time to study practical skills.

[Key words] Team-Based Learning (TBL), educational method, perinatal nursing

[要 旨]

目的：2013年度より取り入れているチーム基盤型学習 (Team-Based Learning : TBL) の教育効果と TBL を教授方法として取り入れた目的の達成状況を学生の声から評価した。

方法：周産期看護学実習を終えた学部3年生にフォーカスグループインタビューを行った。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った (承認番号13-037)。

結果：学生88名の語りから2つのカテゴリーが抽出された：【座学と実習のつながり】【チームで取り組む意味】【座学と実習のつながり】は6つのサブカテゴリーが見出された：〈知識の応用〉〈学習方法の習得〉〈実習に直結した内容〉〈内容の不全感、不足感〉等。【チームで取り組む意味】は5つのサブカテゴリーが見出された：〈チーム内での協力体制〉〈チーム間での効果的な意見交換〉〈仲間意識の芽生え〉〈チーム内の差〉等。

結論：TBL を通して学内での学びと実習の結びつきがスムーズだったという肯定的な結果が得られた一方、実践技術の学習不足感の声もあった。

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科ウイメンズヘルス・助産学研究室・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Women's Health and Midwifery

〔キーワード〕 チーム基盤型学習, 教育方法, 周産期看護学

I. はじめに

チーム基盤型学習 (Team-Based Learning, 以下 TBL とする) は, 米国の Larry Michelesen によって開発, 確立された, 少人数学習の効果を多人数クラスにおけるグループ・ダイナミクスに応用した学習方法である¹⁾。TBL は従来の講義形式とは異なり, 臨床場面に類似した設問や状況設定のシナリオを通して, 知識の習得だけでなく, 学生自身が知識を応用し学びを深めていく学習方法である。

聖路加国際大学 (以下, 本学) の周産期看護学の科目では, 2012年度より教授方法としてこの TBL を取り入れている。我々はこの TBL を導入した際, 学習目標として下記の2つを挙げた。

- TBL を使用して周産期にある対象を理解するために学んだ知識や技術を臨床で活用し, 応用することができる。
- チームで協力しながら課題を解決している中で, チーム力を身に付けることができる。

特に重視したのは, 学内での学びから実習への移行をスムーズにする, ということであった。そこで今回, TBL の教育効果と TBL を教授方法として取り入れた目的の達成状況を学生の声から評価し, 今後の課題を考察したので, ここに報告する。

II. 周産期看護学の科目構成

周産期看護学実習の前に, 学生は2年次後期に「周産期看護学 (基礎)」(1単位) と, 3年次前期に「周産期看護学 (実践方法)」(2単位) を受講する。

周産期看護学 (基礎) は, 妊娠・分娩・産褥・新生児期の基礎的な知識の学習が主に講義形式で行われる。ただし最後の授業では, 次年度に向けての準備として TBL 演習を行っている。

周産期看護学 (実践方法) では, 周産期看護学 (基礎) の知識をもとにアセスメントやケアなどを考える, より実践的な内容になっている。授業のほとんどが TBL 演習で行われ, 学内での学びから実習への移行をスムーズにするために, 表1のように様々な演習を行っている²⁾。

III. TBL のプロセス

学生は TBL 演習に参加する前に, 教員から配布された予習資料をもとに学習し, 準備を整えてくることが求められる。そして TBL 演習ではまず個人テスト (individual Readiness Assurance Test : iRAT) を受け, その答え合わせをせずに同じ問題をチーム (各チーム 7 - 8 名) で解く (team Readiness Assurance Test : tRAT)。次に, 問題や解答に異議がある場合は, 教科書や参考書等をもとに教員にアピールをする。その後, 正答率が低かった問題に対して教員がフィードバックを行い, 知識の確認を行う。iRAT や tRAT で基礎的な知識を確認した後, 応用演習問題に取り組むことになる。応用演習問題は教科書を暗記しただけでは解けない, 臨床の状況に即した状況設定問題である。学生はこれをチーム内でディスカッションし, その後チーム間でディスカッションをする。応用演習問題は臨床でよく遭遇する場面におけるケア内容や優先順位を問うているため, 教員からフィードバックをする際には教員の臨床での経験も踏まえて行うことにしている。この流れが TBL の基本のステップであるが, 毎回の学習目標に応じて iRAT と tRAT を 2 回行ったり, 応用演習問題のみを行うこともある。

IV. 方法

1. 対象者

対象は, 本学において2012年度後期の周産期看護学 (基礎; 1単位), 2013年度前期の周産期看護学 (実践方法;

表1 実習への移行をスムーズにするための演習の工夫

| 演習の工夫 | 具体的な内容 |
|----------------|---|
| 特別講義 | ケアのエビデンスを探すための文献検索, 母乳育児支援, 地域での子育て支援など |
| 病棟見学 | 実習病棟 (LDR, 新生児室など) の見学, 胎盤の見学 |
| フィジカルエグザミネーション | 妊婦・産婦・褥婦および新生児のフィジカルエグザミネーション |
| 看護過程の展開 | 妊娠・分娩・産褥・新生児と継続した事例を用いて, 実際の実習記録を使用して看護過程の展開をする |
| ギャラリーウォーク | チーム毎に作成した看護過程を大教室の壁に貼り, その内容をチーム間で共有する |
| コミュニケーション演習 | 模擬褥婦から退院後の生活に関する情報収集を行い, 退院指導案を作成する |
| TBL シアター | 妊婦健診や分娩場面を再現した劇を鑑賞しケアを考える |
| 様々な立場の方の理解 | 体験談を聴く: 妊娠中の女性, 出産後の女性, 分娩に立ち会った夫など |

表2 Team-Based Learning (TBL) と実習とのつながり

| 【カテゴリー】 | 〈サブカテゴリー〉 | 「語り」 |
|-------------|----------------|--|
| 座学と実習とのつながり | 知識の応用 | ペーパーペイシエントで考えて、実習で応用できた。 応用演習問題は正解がなかったからよかった。いろいろな考え方ができた。 |
| | 学習方法の習得 | 分からないことを調べる方法が学べた。 自発的に学んだことで実習の時にも役に立った。 |
| | 実習に直結した内容 | 実際に実習で使う記録で練習ができたのがよかった。 チームで看護展開することで実習の時には一人でできた。 |
| | 実習を想定した場面設定 | 褥婦との会話を（演習で）したことで、情報収集の仕方がわかった。 訪室時の声掛けや質問の仕方が勉強になった。 産褥の流れがイメージできたから（実習では）先回りして動けた。 |
| | 内容の不全感、不足感 | アセスメントが難しかったから、もっと授業で練習がしたかった。 実習では母乳に関する知識が大事だったから、もう少し具体的に勉強したかった。 |
| | 実技への心配 | 実習ではたくさんの知識と技術が必要だった。 妊婦さんの（レオポルドの）触診方法が曖昧のままだった。 新生児のバイタルサインズの測定が曖昧のままだった。 |
| チームで取り組む意味 | チーム内での協力体制 | 一人で看護過程に取り組むよりもチームで協力してできたのがよかった。 現場ではチームケアを行うから、授業もチームで取り組めたのがよかった。 チーム内の役割を考えるものTBL。 |
| | チーム間での効果的な意見交換 | 個人だけでなく、チーム内だけでなく、ギャラリーウォークをして他のチームの考えを知ることができたのがよかった。 |
| | 仲間意識の芽生え | iRAT（個人テスト）は自己責任、tRAT（チームテスト）はチームの責任だから頑張った。 チーム内のメンバー同士で刺激し合えた。 |
| | チーム内の差 | チーム内に予習をしない人もいて、自己学習に差があった。 働き出したら様々な人がいるし、すべてを受け入れることも必要だと思う。 |
| | ピア評価を受けて自己内省 | 客観的に自分を知ることができた。 ピア評価に書かれたよいことを受けて、次回も頑張れた。 自分を振り返ることができた。少しずつよくなっている自分がいた。 |

2単位)の単位を取得し、2013年度の後期に周産期看護学実習を行った学部3年生88名とした。

2. データ収集方法

3年次前期の周産期看護学（実践方法）の科目が終了する際に、研究目的を文書および口頭で説明し、研究への協力を求めた。そして後期の周産期看護学実習終了後に再度研究協力の説明と依頼を行い、実習を終えた学生に対して、フォーカスグループインタビュー（12-13名×7グループ）を行った。1回のインタビュー時間は60分程度であった。

インタビューの際は研究者らが研究協力者の発言内容の書き取りを行った。そして書き取ったインタビュー内容を研究目的に沿って語りを抽出し、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象度を上げて内容の分析を行った。

データ収集期間は2013年9月から2014年1月までであった。

本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号13-037）。

V. 結果

対象者88名全員からデータが得られた。得られた結果を表2に示す。なおカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉, 語りは「 」として示している。

内容は大きく次の2つのカテゴリーに分類できた:【座学と実習のつながり】【チームで取り組む意味】。

1. 【座学と実習のつながり】

【座学と実習のつながり】については、次の6つのサブカテゴリーが見出された:〈知識の応用〉〈学習方法の習得〉〈実習に直結した内容〉〈実習を想定した場面設定〉〈内容の不全感、不足感〉〈実技への心配〉。

〈知識の応用〉に関しては、TBLでは事例を用いて学習を進めるため、「ペーパーペイシエントで考えて、実習で応用できた」とあるように、学内において一般的な対象について学習をして、実習では対象者の個別性に合わせてその知識を応用していた。また、「応用演習問題は正解がなかったからよかった。いろいろな考え方ができた」とあるように、状況により様々なケアが必要になるということを学んでいた。

TBLのステップを通して学生は〈学習方法の習得〉を

していた。学生は予習をしてから TBL に臨まなければならない。そのためまずは学内で「分からないことを調べる方法が学べた」ことで、「自発的に学んだことで実習の時にも役に立った」。このように学ぶ方法を身に付けたことで、学生はそれが実習の際にも役に立ったと語っていた。

〈実習に直結した内容〉に関しては、「実際に実習で使う記録で練習ができたのがよかった」「チームで看護展開することで実習の時には一人でできた」とあるように、見慣れた記録用紙を用いて実習をすることができ、以前に取り組んだことのある思考過程を踏めたことを肯定的に捉えている様子がうかがえた。

学生は「褥婦との会話を（演習で）したことで、情報収集の仕方がわかった」「訪室時の声掛けや質問の仕方が勉強になった」「産褥の流れがイメージできたから（実習では）先回りして動けた」と語り、〈実習を想定した場面設定〉を学内で様々な形で体験したことが実習場面で活かされていた。

肯定的な語りが多くあった一方、〈内容の不全感、不足感〉〈実技への心配〉といったネガティブな意見も出された。学生は「アセスメントが難しかったから、もっと授業で練習がしたかった」「実習では母乳に関する知識が大事だったから、もう少し具体的に勉強したかった」と〈内容の不全感、不足感〉を語っていた。また、「実習ではたくさんさんの知識と技術が必要だった」「妊婦さんの（レオボルドの）触診方法が曖昧のままだった」「新生児のバイタルサインズの測定が曖昧のままだった」と〈実技への心配〉を語っていた。このように実習で難しさを感じた内容に関しては、事前に学内で学びを深めておきたかった様子が語られた。

2. 【チームで取り組む意味】

【チームで取り組む意味】については、次の5つのサブカテゴリーが見出された：〈チーム内での協力体制〉〈チーム間での効果的な意見交換〉〈仲間意識の芽生え〉〈チーム内の差〉〈ピア評価を受けて自己内省〉。

TBL は毎回チームで取り組む課題があるため〈チーム内での協力体制〉が求められる。学生は「一人で看護過程に取り組むよりもチームで協力してできたのがよかった」と語り、各々で学習してきた知識をチーム内で出し合い、協力して課題に取り組んでいた。また、「現場ではチームケアを行うから、授業もチームで取り組めたのがよかった」と語られたように、将来はチーム医療の一員となる自覚を持ちながらチーム内で協力をしていた。そして様々な課題を効果的かつ効率的に進められるよう「チーム内の役割を考えるもの TBL」と語り、チームメンバー間での調整を行っていた。

TBL ではチーム内だけでなく〈チーム間での効果的な

意見交換〉も行っている。学生は「個人だけでなく、チーム内だけでなく、ギャラリーワークをして他のチームの考えを知ることができたのがよかった」と語り、様々な意見を幅広く得ることができる学習方法について肯定的な考えを示していた。

TBL では個人テストとチームテストの両方の得点が評価対象となる。そのため学生は「iRAT は自己責任、tRAT はチームの責任だから頑張った」「チーム内のメンバー同士で刺激し合えた」と、TBL を通して〈仲間意識の芽生え〉が生まれた様子を語っていた。

チーム内で協力する様子があった一方、学習状態に関して〈チーム内の差〉があったと感じる学生もいた。チームによっては「チーム内に予習をしない人もいて、自己学習に差があった」と語り、チームメンバーの準備状態に不満がみられることもあった。しかしそのような中でも「働き出したら様々な人がいるし、すべてを受け入れることも必要だと思う」と語り、準備が不十分なメンバーに対してチーム内で何とかしようという気持ちが表れていた。

学生はチームメンバー同士で行うピア評価を通して「客観的に自分を知ることができた」と語っていた。そして「ピア評価に書かれたよいことを受けて、次回も頑張れた」「自分を振り返ることができた。少しずつよくなっている自分がいた」と語り、〈ピア評価を受けて自己内省〉し、チームに対する自分の責任を果たそうと努力している様子がうかがえた。

VI. 考察

周産期看護学実習を終えた直後の学部3年生88名にフォーカスグループインタビューを行い、TBL を通して学んだ知識や技術を実習で活用し応用できたか、またチーム力を身に付けられたかについて語ってもらった。その結果、我々が目的としていたように【座学と実習のつながり】を学生は実感し、【チームで取り組む意味】についても考えることができていた。

1. 知識や技術の臨床での活用と応用

結果から、多くの学生は学内で身に付けた知識を実習場面で活用し、応用できていたと言える。TBL では知識を丸暗記しただけでは解けない様々な応用演習問題に取り組む。その問題に取り組む過程で曖昧だった知識を確認し、状況により様々なケアが必要になるということを学ぶ。そのため、学生は事前に学内で経験したことが、実際の場面で“本物”の対象者の状況を捉えやすくなったのだと考えられる。

学生にとって実習は初めてだらけの体験である。初めての病棟、スタッフ、受け持ち対象者など、まずそれら

の環境や人に慣れることは学生にとって大きなストレスになる。またペーパーペイシエントと違い、対象者の健康状態は日々変化していく。その変化する対象者から情報収集をし、アセスメントしケア計画を立案することはスピード感も求められる。そのため、実際に使用する実習記録を応用演習問題で用いたことで、実習前に練習ができ、実習中もその見慣れた実習記録を使用することができたため、多くの学生が実習で困難に感じる記録用紙に慣れる、というストレスが少なかったと考えられる。

一方、実習で困難と感じた内容に関しては、もっと事前に学内で取り組みたかった、という科目に対する不快感として語られた。特に周産期領域に特徴的なレオポルドの触診法や新生児のバイタルサインズの測定、乳房の観察や母乳育児に関する知識については演習で学習しているものの、実習でその重要性を感じたからこそ、より具体的に学びたかったという声があったと言える。TBLは大人数のクラスでも行うことができ、一人の教員でも効果的な教育が行える³⁾というメリットがあるが、TBLの基本ステップの中に実技の演習は含まれていない。そのため、我々は実習につながる演習としてフィジカルエグザミネーション等も取り入れてはいたが、より教育効果を高め、その技術を定着させ実習でそれを使えるような工夫を検討していく必要がある。

2. チーム力の獲得

TBLが医療系の教育に適しているといわれる理由の一つに、協働する力が身に付くということが挙げられている³⁾。臨床では、様々な場面で様々な職種の方々とチームとしてケアを提供することが求められる。そのような中で、どのようにコミュニケーションをとるのか、意見が合わない場合はどのように歩み寄るのか、言いにくいことをどのように相手に伝えるのか、チームとして最大限に機能するには各々がどのような役割を取るべきかなど、対人関係の調整力や構築力も求められる。そのようなチーム力を学生に身に付けてほしいというのもTBL導入の目的の一つでもあった。チームメンバーにより差があったと語る学生もいたものの、学生たちは知識

を持ち寄って一つの課題に取り組むということもでき、さらに将来は医療人として働く際は様々なメンバーと協働する必要があるためそれを受け入れなければならないということも自覚していた。

VII. 結論と今後の課題

学生はTBLを通して自ら学ぶ姿勢を身に付け、座学で得た知識を実習で応用できていた。またチームで課題に取り組むことで仲間意識が芽生え、お互いに協力しながら問題を解決できたことが語られた。

学内での学びと実習の結びつきがスムーズだったという肯定的な結果が得られた一方、学習内容の不足感や実技をより具体的に学びたいという声もあった。今後はそれらを解消するための学習方法を検討する必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は、第55回日本母性衛生学会総会・学術集会（幕張）において口頭発表を行い、それを一部加筆したものです。

引用文献

- 1) Fink, L.D. & Parmelee, D.X. 諸言. L.K. Michaelsen, D.X. Parmelee, K. K. McMahon & R.E. Levine (Eds.). TBL—医療人を育てるチーム基盤型学習：成果を上げるグループ学習の活用法（瀬尾宏美監修）. 東京：シナジー；2009. p.xv-xix.
- 2) 飯田真理子. 第3章 TBL の実際. 五十嵐ゆかり, 飯田真理子, 新福洋子. トライ！看護に TBL—チーム基盤型学習の基礎のキソ. 東京：医学書院；2016. p.76-105.
- 3) 五十嵐ゆかり. 第1章 TBL を知る. 五十嵐ゆかり, 飯田真理子, 新福洋子. トライ！看護に TBL—チーム基盤型学習の基礎のキソ. 東京：医学書院；2016. p.2-18.